

酔筆(11) 画を描くための「技法と心境」について(2/2)

新井 俊郎

表題は前回書いたように、平井さんから頂いた葉書に答えようとしてつけたものである。平井さんが言われるように、悠遊会には古参新参が入り混じっているから、古参は古参なりに、新参は新参なりに、この「会報」で自らが得たノウ・ハウを開陳したらいいと思う。

さて、昔々網干教室にいたころ、善福寺公園で薄の描き方を習ったことがある。毎週毎週、遠近・明暗・濃淡・強弱を叩き込まれた頃の話で、12月の下旬だった。午後の日の傾きが早く、4時前だというのに、薄暗くなった。何枚目かのスケッチ(ダーマトグラフだけの素描)をやっと描きあげた。この時、網干さんが傍らに立っておられるのに気づいた。

「良いじゃあないですか。これはいい。彩色はしないで、このまま家に持ち帰って、模写しなさい。何枚も模写しなさい。その模写したスケッチに彩色なさい。そして、スケッチと彩色の係り合いを御自分で納得なさい」

30枚位、この教えを実行した。段々彩色が納得できるようになったとき、現場で描いたスケッチに彩色した。3回目の個展に非売品の札をつけて出した。ある病院の院長が会場を丹念に見ていたが、非売品を所望した。私が駄目だといったら、100万円ではどうかと言った。私は酒の勢いもあって200万円でも駄目だと言った。これを見ていた細君は後で

「あなたと言う人は、ほんとに馬鹿な人ねえ」と言いやがった。この『善福寺池』は今でも大事に保存している。この1年ほどあと、新宿御苑の池を描いた。このときは、1時間で彩色までしなさい、という号令がかかった。スケッチ10~20分、彩色40~50分ということだった。

「冬枯れの新宿御苑の雑木群たかく抜きでポプラが二本」

不思議なもので、1時間と言われたら、1時間で仕上がった。この1枚も大事に保存している。裏には「網干先生に初めてほめられる」なんて、書いてある。4年3ヶ月の間に、ほめられたのはこの2回だけであった。

彩色を現場にするか、ホテルや自宅にするかは、個人の勝手だが、私は現場ではしないことが多くなった。スケッチ・ブックの前の紙の裏に現場の色をメモする。たとえば、ミドとかウスミドとかウ・ミとかコ・ミドとかである。昔は専門家の真似をして、grとかyellとかy・gとか書いたが、馬鹿馬鹿しいのでやめた。現場で彩色すると、つつい現場の色に左右されてしまうので、画にならなくなるな、と思うようになったからである。

以上は、すべてp6やp8のスケッチ・ブックを使ったときのことで、最近ではp2やp3くらいのスケッチ・ブックを使うことが多い。散歩やら旅行の時、上着やコートのポケットに入る大きさである。この場合は、現場彩色は一切しない。次々と描きまくる早描きであり、走り描きである。色のメモだけはする。ダーマトグラフは用いないで、最近出てきた水性ボールペンのノック式 1.0mmを使っている。水性だから書きやすい。しかも、1,2分もすると水に溶けなくなる。

いよいよ、難問の「心境」であるが、今の私は、ほとんど情けない心境の持主である。描くとき、先ず巧く描こうと思っている。多摩川の堤で描いていると、よく背後に人がそっと立つことがある。これが気になる。巧く見せようとする。この結果は、まことに惨めな作品となって報いられる。毎日が、この繰返しである。ただ、偶然、描く自分と描かれる対象が一体になって、仕上がることもある。廻りに人がいても、いなくても対象と自分が、一つになって描いている瞬間を忘れることがある。こんなとき、いい作品が生まれるのだと思う。この偶然を、如何にして必然とするか。

「打撃とはバットを身体から離すことである」と言った落合博満の言葉にすばらしいヒントがあるような気がしてならない。

(2003・2・14)